

〔研究論文〕

下野国分寺創建初期における三毳山麓窯跡群の位置づけ

— 軒先瓦の比較分析から —

宇 高 美 友 子

これまでの下野国分寺の瓦研究で三毳山麓窯跡群が最も注目を集めるのは、下野国分寺式軒先瓦の生産が集中する町谷瓦窯であり、尼寺造営段階である。しかし、平成 11 年から 18 年に下野国分寺（僧寺）の史跡整備に伴う発掘調査が行われたことで、新たな発見があった。それは、三毳山麓周辺では初期の段階から瓦の生産を行っており、僧寺金堂出土の郡系軒先瓦については均等に各郡の瓦が入っているわけではないということである。そこで本稿では、平成 11 年の僧寺金堂の発掘調査で出土した軒先瓦を含め生産地ごとに数量分析を行い、僧寺金堂では三毳山麓窯跡群産と考えられる軒先瓦が 9 割を占めることを明らかにした。また、これらの軒先瓦を豊岡遺跡で出土する同範瓦と比較したところ、先に豊岡遺跡に供給されていたものの、国分寺造営を機にむしろ僧寺金堂向けに生産・供給されていることを指摘した。このことから、町谷瓦窯に瓦生産が集中する以前である下野国分寺創建初期から、三毳山麓窯跡群は下野国分寺における瓦生産の中心地であったと考える。

キーワード：古代 下野国分寺 金堂 三毳山麓窯跡群 軒先瓦

I. 先行研究

(1) 古代下野国と東山道

大和政権下での栃木県地方には、那須国と下毛野国という 2 つの国がつくられていた。大化元年（645）の大化の改新以降、地方行政の整理にあわせて両国を下毛野国にし、和同 6 年（713）に元明天皇によって地名は好字 2 文字を付けることとされて以降、下野国と表現されるようになった⁽¹⁾。『和名類聚鈔』によると⁽²⁾、下野国には、足利郡・梁田郡・安蘇郡・都賀郡・寒川郡・河内郡・芳賀郡・塩屋郡・那須郡の 9 郡の存在が確認されている。下野国に通る道路は東山道で

あり、中路に指定されていた。平安時代中期の法令集である『延喜式』によると、下野国内には足利・三嶋・田部・衣川・新田・磐上・黒川の駅があったと記載されている⁽³⁾。それらが現在のどの位置にあったかは諸説あるが、上野国から現在の足利市に入り、三嶋山の北を通過して下野国府のある栃木市田村町を経て、下野薬師寺から北上して、小松原遺跡のある大田原市湯津上に至り、那須町伊王野付近とみられる黒川駅家から白河関に抜けたと考えられている⁽⁴⁾。

(2) 地理的・歴史的環境

下野国分寺は、栃木県下野市国分寺⁽⁵⁾に所在し、栃木県の県中央部南半に位置する。国分寺のある台地は、古墳時代後期から終末期にかけて県下最大の古墳群が展開した地域であり、古墳時代後期からすでに下毛野地域の中心地のひとつであったと考えられている⁽⁶⁾。主な古墳としては、摩利支天塚古墳、琵琶塚古墳、吾妻古墳、甲塚古墳、愛宕塚古墳などの前方後円墳や丸塚古墳などの円墳があげられ、6世紀前葉から7世紀前葉にかけて築かれた。摩利支天塚・琵琶塚古墳は、僧寺跡より南方に約1.5kmの同じ台地上に位置しており、摩利支天塚古墳は全長約121m、琵琶塚古墳は全長約123mの栃木県最大規模の古墳であり、その他の古墳も大型に属している。

思川を挟んで僧寺跡の南西約2kmには下野国府跡があり、北東方約7kmには下野薬師寺跡が位置する。さらにこれらは東山道を介して直線的に結ばれている。これらのことから、古墳時代後期以降、古代において下野国分寺跡周辺の地域は、下野の中枢地域であったと考えられている（図1）。



（図1）下野国分寺の位置

(3) 下野国分寺の伽藍配置

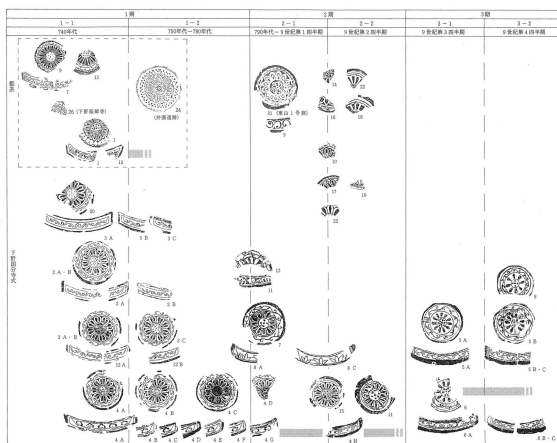
僧寺は、これまでの調査によって伽藍配置は、東大寺式伽藍配置である。南門・南大門・中門・金堂・講堂が一直線に並び、回廊が中門と金堂をつなぎ、塔を南大門・中門の東方に置き、鐘楼・経蔵を金堂・講堂の東西に配していることが明らかになっている。金堂東には掘立柱建物跡が見つかっており、金堂が完成するまでの間の仮設的な仏堂と考えられている。発掘調査を通して伽藍地と、その

外側を区画する寺院地の範囲や変遷がほぼ明らかにされており、Ⅰ期からⅣ期の変遷が考えられている⁽⁷⁾。今回研究した下野国分寺創建期はⅠ期に当たる。

(4)下野国分寺における造瓦体制と造営過程

下野国分寺より出土した軒先瓦は大きく分けて下野国分寺式軒先瓦と郡系軒先瓦の 2 者が存在しており、大橋泰夫氏によって定義づけられている⁽⁸⁾。下野国分寺式軒先瓦については、「下野国分寺の鑑瓦は、創建期から平安時代の改修の時期まで瓦当文様に一つの流れを認めることができる。それは、周縁が直立縁で外区に唐草文を巡らし、内区を複弁八葉とする鑑瓦 20 型式を祖型として、文様の退化から一つの組列として捉えることができる。ここでは、そうした一群の鑑瓦を下野国分寺式鑑瓦とし、これと組む宇瓦を含めて下野国分寺式軒先瓦と呼ぶ。」としている。郡系軒先瓦については、「下野国分寺式軒先瓦と文様意匠を異にする一群があり、本来は各郡の寺院・郡衙に使用したものである。そうした瓦は国府・国分寺以外では他の郡関係の遺跡に供給されない。生産遺跡は、河内郡・芳賀郡内などの窯である。こうした各郡生産の軒先瓦を郡系軒先瓦とする。郡名の文字瓦がないことも特徴の一つである。」としている。

下野国分寺出土軒先瓦も先述した遺構の変遷の中で位置づけられており、Ⅳ期は瓦生産を行っていないため 3 期に分けられる。創建期は 1 期にあたるが、出土瓦の特徴から 1-1 期、1-2 期に細分され、さらに前半と後半に細分される（図 2）。



（図 2）下野国分寺出土軒先瓦編年表

1-1 期（740 年代）

前半：僧寺金堂造営段階。各郡の複数の窯跡で生産された郡系瓦が主体を占める（図 3）。

＜軒先瓦＞鑑瓦 1・9・13 型式、宇瓦 1・7 型式

＜生産遺跡＞河内郡水道山瓦窯、寒川郡乙女不動原瓦窯、三毳山麓群内窯跡

後半：僧寺塔造営段階。各郡の複数の瓦窯で下野国分寺式軒先瓦の生産が開始され、主体を占めるようになる（図 4）。

＜軒先瓦＞鑑瓦 2A・2B・3A・3B・4A 型式、宇瓦 2A・3A・3B・4A・12A 型式

＜生産遺跡＞河内郡水道山 3 号窯、那須郡荒神平瓦窯、芳賀郡西山瓦窯、三毳山麓群内窯跡

1-2 期（750～780 年代）

前半（750年～760年代）：尼寺金堂造営段階。複数の瓦窯で下野国分寺式軒先瓦を生産するのをやめ、三叢山麓の町谷瓦窯で集中的に生産が行われる（図5）。

＜軒先瓦＞鑑瓦 3C・4A・4B 型式、宇瓦 2B・3C・4A・4B・12B・12C 型式

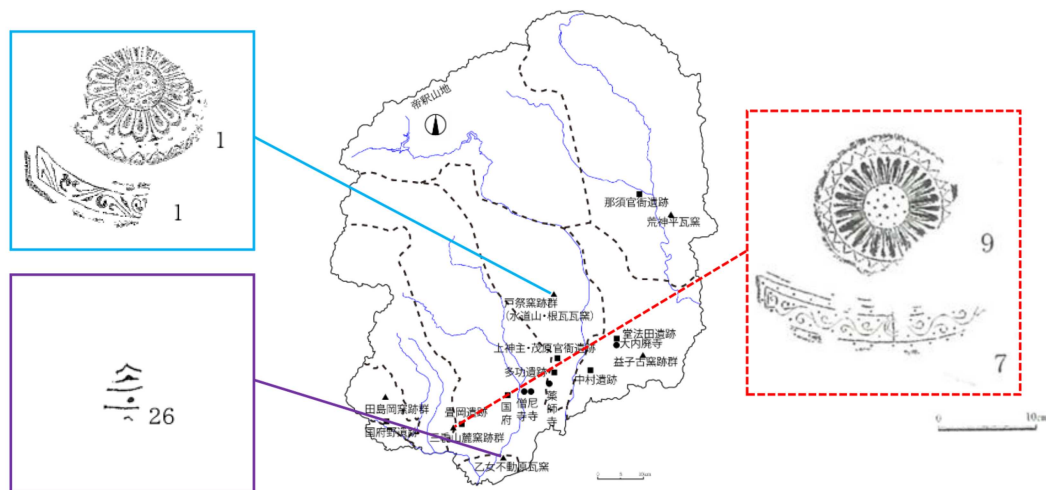
＜生産遺跡＞三叢山麓群町谷瓦窯

以降、下野国分寺式軒先瓦は三叢山麓窯跡群内の窯跡を転々として生産される。

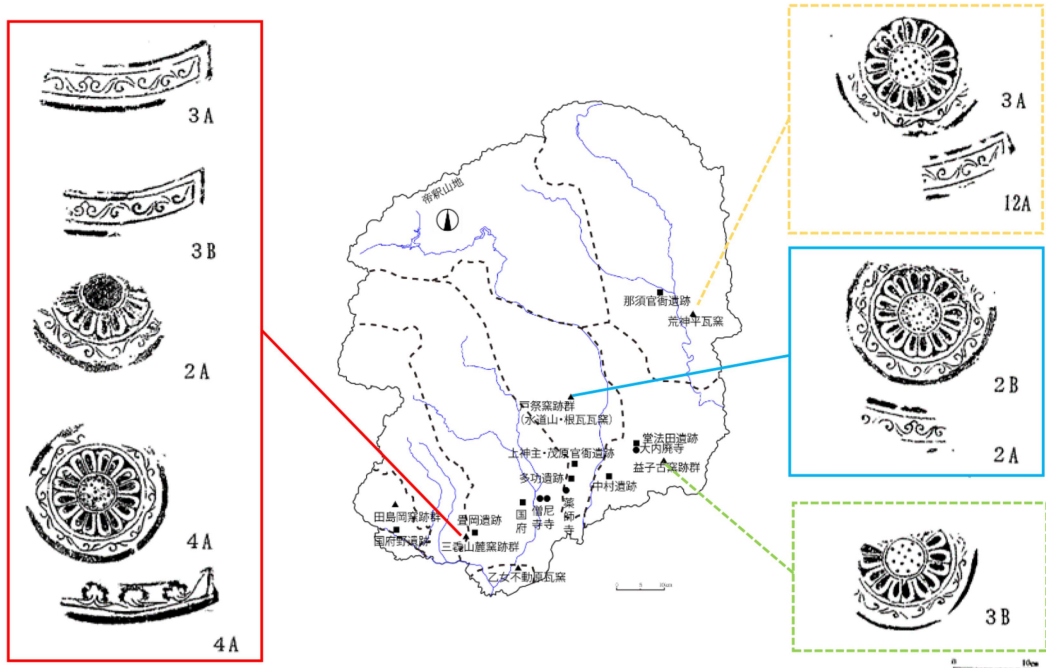
（5）僧寺金堂発掘調査の成果

平成11年から同12年にかけて下野市教育委員会による僧寺金堂の発掘調査が行われた。この調査によって、新たに明らかになってきたことがある⁽⁹⁾。

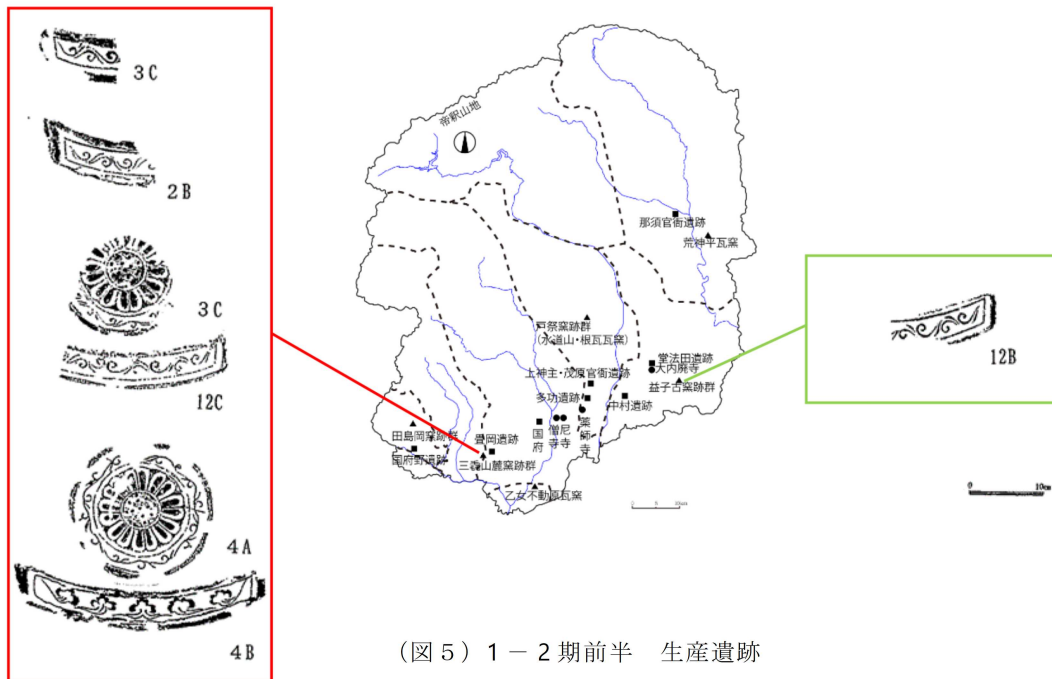
- ・平成9年報告で1点ずつ出土しているとされていた郡系軒先瓦の鑑瓦24型式と鑑瓦26型式はその後の調査では出土していない。
- ・僧寺の金堂造営段階（1－1期前半）では、郡系軒先瓦が使用されていたと考えられているが、均等に各郡の軒先瓦が入っているわけではない。特に三叢山麓窯跡群産と考えられる、鑑瓦9型式と宇瓦7型式の出土が目立ち、水道山瓦窯産の鑑瓦1型式及び宇瓦1型式の出土量は少ない。



（図3）1－1期前半 生産遺跡



（図４）１－１期後半 生産遺跡



（図５）１－２期前半 生産遺跡

Ⅱ．数量分析

前章にて、平成 11 年の発掘調査で三毘山麓群窯跡群産と考えられる「郡系軒先瓦」の出土が目立つとの指摘があることを述べた。これらの軒先瓦が僧寺金堂

よりまとまって出土していることは以前より指摘されていたが⁽¹⁰⁾、近年発掘された瓦の出土量までは含まれていない。そこで、新資料の出土数も含め分析することで、僧寺金堂からの出土割合をより明確にする。

数量分析を行うにあたり、大橋泰夫氏による1997年刊行の『下野国分寺跡Ⅻ瓦・本文編』と下野市教育委員会が行った調査（未報告）の合計数量を出した。1997年報告段階での郡系軒先瓦の出土数は63点であったが、今回未報告の調査で新たに131点出土していることがわかった。よって、僧寺出土の郡系軒先瓦の総点数は194点である。まず、僧寺の主要堂塔ごとに出土量を見ていくと、金堂95点、中門8点、塔4点、回廊14点、講堂2点、南大門15点、推定鐘楼4点、推定経蔵6点、僧坊3点、その他37点⁽¹¹⁾、不明6点⁽¹²⁾である（表1）。最近の調査で出土量は増えたものの、金堂からの出土量が最も多く全体の過半数を占めることはこれまでと変わらない。瓦窯ごとの出土量は以下のとおりである。

（1）水道山瓦窯産（表2）

水道山瓦窯は河内郡内に所在した瓦窯である。僧寺で出土した水道山瓦窯産の軒先瓦は、鑑瓦1型式（線鋸齒文縁複弁八葉蓮華文）及び宇瓦1型式（均整唐草文）、宇瓦13型式（均整唐草文）であり、これらは組み合う軒先瓦である。また、僧寺以外では下野薬師寺、下野国府、多功遺跡、上神主・茂原官衙遺跡にも供給している。鑑瓦1型式は3点出土が確認されていたが、新たに7点が確認され、合計10点となった。宇瓦1型式も3点確認されていたが、新たに4点確認され、合計7点となった。宇瓦13型式は2点確認されており、近年の調査では発見されていない。内訳は以下のとおりである。

金堂：鑑瓦1型式5点、宇瓦1型式3点、宇瓦13型式0点の合計8点。

中門：鑑瓦1型式1点、宇瓦1型式0点、宇瓦13型式0点の合計1点。

塔：鑑瓦1型式1点、宇瓦1型式0点、宇瓦13型式0点の合計1点。

回廊：鑑瓦1型式0点、宇瓦1型式1点、宇瓦13型式0点の合計1点。

講堂：鑑瓦1型式1点、宇瓦1型式0点、宇瓦13型式0点の合計1点。

南大門：鑑瓦1型式0点、宇瓦1型式2点、宇瓦13型式2点の合計4点。

その他：鑑瓦1型式1点、宇瓦1型式1点、宇瓦13型式0点の合計2点。

不明：鑑瓦1型式1点、宇瓦1型式0点、宇瓦13型式0点の合計1点。

推定鐘楼跡、推定経蔵跡、僧房からの出土はない。

（2）乙女不動原瓦窯産（表3）

乙女不動原瓦窯は寒川郡に所在した瓦窯であり、僧寺で出土した乙女不動原瓦窯産の軒先瓦は、鑑瓦26型式（線鋸齒文縁単弁八葉蓮華文）である。僧寺以外では下野薬師寺にも供給している。鑑瓦26型式は昭和61年度に行われた第10

次調査で 1 点出土したとの記載があるが、下野市教育委員会が行った調査では出土していない。

（3）三毳山麓窯跡群内瓦窯産（推定）（表 4）

三毳山麓窯跡群は、安蘇郡と都賀郡に跨る三毳山に所在した瓦窯群であり、僧寺で出土した三毳山麓窯跡群内瓦窯産（推定）の軒先瓦は、鑑瓦 13 型式（線鋸歯文縁複弁八葉蓮華文）、鑑瓦 9 型式（線鋸歯文縁単弁十六葉蓮華文）、宇瓦 7 型式（均整唐草文）である。また、僧寺以外では鑑瓦 13 型式は下野国府・新里北浦遺跡、鑑瓦 9 型式及び宇瓦 7 型式は下野国府・豊岡遺跡にも供給している。鑑瓦 13 型式は 5 点確認されており、新たに 17 点が確認され、合計 22 点となった。鑑瓦 9 型式は 28 点出土しており、新たに 37 点が確認され、合計 65 点となった。宇瓦 7 型式は 20 点出土しており、新たに 66 点を確認し合計 86 点となった。内訳は以下のとおりである。

金堂：鑑瓦 13 型式 6 点、鑑瓦 9 型式 19 点、宇瓦 7 型式 62 点の合計 87 点。

中門：鑑瓦 13 型式 0 点、鑑瓦 9 型式 4 点、宇瓦 7 型式 3 点の合計 7 点。

塔：鑑瓦 13 型式 2 点、鑑瓦 9 型式 0 点、宇瓦 7 型式 1 点の合計 3 点。

回廊：鑑瓦 13 型式 4 点、鑑瓦 9 型式 9 点、宇瓦 7 型式 0 点の合計 13 点。

講堂：鑑瓦 13 型式 0 点、鑑瓦 9 型式 1 点、宇瓦 7 型式 0 点の合計 1 点。

南大門：鑑瓦 13 型式 2 点、鑑瓦 9 型式 6 点、宇瓦 7 型式 3 点の合計 11 点。

推定鐘楼：鑑瓦 13 型式 1 点、鑑瓦 9 型式 3 点、宇瓦 7 型式 0 点の合計 4 点。

推定経蔵：鑑瓦 13 型式 0 点、鑑瓦 9 型式 2 点、宇瓦 7 型式 4 点の合計 6 点。

僧房：鑑瓦 13 型式 0 点、鑑瓦 9 型式 1 点、宇瓦 7 型式 2 点の合計 3 点。

その他：鑑瓦 13 型式 3 点、鑑瓦 9 型式 19 点、宇瓦 7 型式 11 点の合計 33 点。

不明：鑑瓦 13 型式 4 点、鑑瓦 9 型式 1 点、宇瓦 7 型式 0 点の合計 5 点。

（4）西山瓦窯産（推定）（表 5）

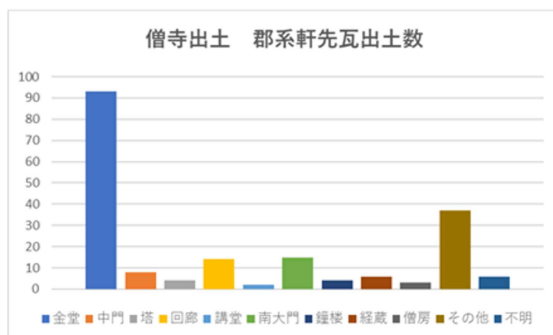
西山瓦窯は、芳賀郡に所在した瓦窯であり、僧寺で出土した西山瓦窯産（推定）の軒先瓦は鑑瓦 24 型式（単弁十六葉蓮華文）である。鑑瓦 24 型式は平成 2 年度に行われた第 18 次調査区の表土中から 1 点出土しているが、下野市教育委員会が行った調査では出土していない。

（5）小結

以上の結果から、水道山瓦窯産と三毳山麓群内瓦窯産の軒先瓦は金堂からの出土が目立ち、金堂出土割合を生産地ごとにみると、水道山瓦窯が 10 %、乙女不動原瓦窯が 0 %、三毳山麓窯跡群内の瓦窯が 90%、西山瓦窯が 0 %となる（表 6）。考察をまとめると以下のとおりである。

- ①寒川郡の乙女不動原瓦窯産の鑑瓦 26 型式は、全体で 1 点しか出土しておらず、金堂からの出土もないことから、創建期に主体的に使用されたとは考えにくい。
- ②芳賀郡の西山瓦窯産の鑑瓦 24 型式も全体で 1 点のみの出土であり、金堂からの出土もないことから、創建期に主体的に使用されたとは考えにくい。
- ③河内郡の水道山瓦窯産の鑑瓦 1 型式及び宇瓦 1・13 型式は金堂からの出土が確認されるが、9 割が三毳山麓窯跡群内瓦窯産と考えられる瓦であり、主体を占める。

以上のことから、僧寺金堂出土瓦には各郡の郡系軒先瓦が均等に入っていたわけではなく、三毳山麓窯跡群産の瓦が多くを占め、主体的に供給されていたと考ええる。



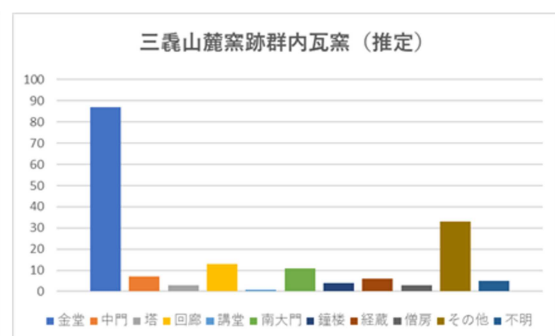
（表 1）僧寺出土 郡系軒先瓦出土数



（表 2）水道山瓦窯産 出土数



（表 3）乙女不動原瓦窯産 出土数



（表 4）三毳山麓窯跡群内瓦窯（推定） 出土数



（表 5）西山瓦窯（推定） 出土数



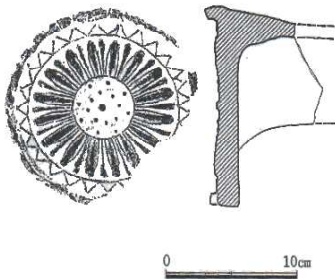
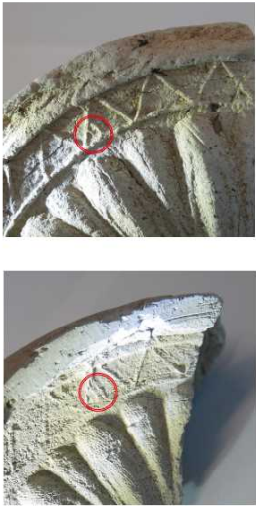
（表 6）僧寺金堂 郡系軒先瓦出土割合

Ⅲ．鑑瓦 9 型式及び宇瓦 7 型式の分析

前章で、三毳山麓窯跡群内で生産されたと推定される軒先瓦が 9 割を占め、なかでも鑑瓦 9 型式及び宇瓦 7 型式が大半を占めることが明らかになった。これらの軒先瓦は、平成 9 年刊行の報告書内で既に紹介されているが、新資料に関してはまだ触れられていないため、新資料について観察を行った。さらに栃木市岩舟町に所在する豊岡遺跡から同範の軒先瓦が出土していることから、比較することで両遺跡の新旧関係について考察する。

（１）僧寺金堂出土例について

鑑瓦 9 型式の新資料は破片で 17 点出土している。この内、線鋸歯文部分に先行研究に指摘のない範傷があるものを 3 点確認した。確認できた範傷の位置は 2 種類あり、線鋸歯文の中に 2 つ並行するものと、線鋸歯文の外側にあるものである（図 6）。しかしこれらの瓦は破損しており、完全な形の瓦はないため、範傷の有無によって分類することはできない。そのため、ここでは鑑瓦 9 型式の細分は行わず、範傷のある瓦も存在することを示しておきたい。

		
鑑瓦 9 型式 僧寺出土（1996 年）	僧寺金堂出土 範傷 1（新資料）	僧寺金堂出土 範傷 2（新資料）

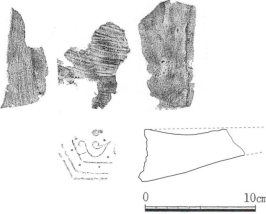
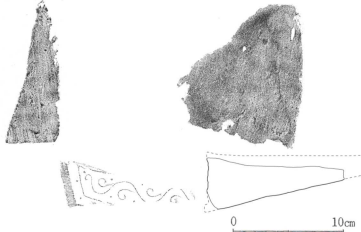
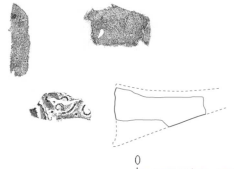
（図 6）僧寺出土 鑑瓦 9 型式範傷について

一方、宇瓦 7 型式の新資料は破片で 58 点出土している。分析のため、瓦当部側から見て左側部残存、右側部残存、両側部が残存していないもの（中央とする）に分けた。

①左側部残存（図 7）

- ・脇区外側を削らないものと削るものの 2 種類がある。

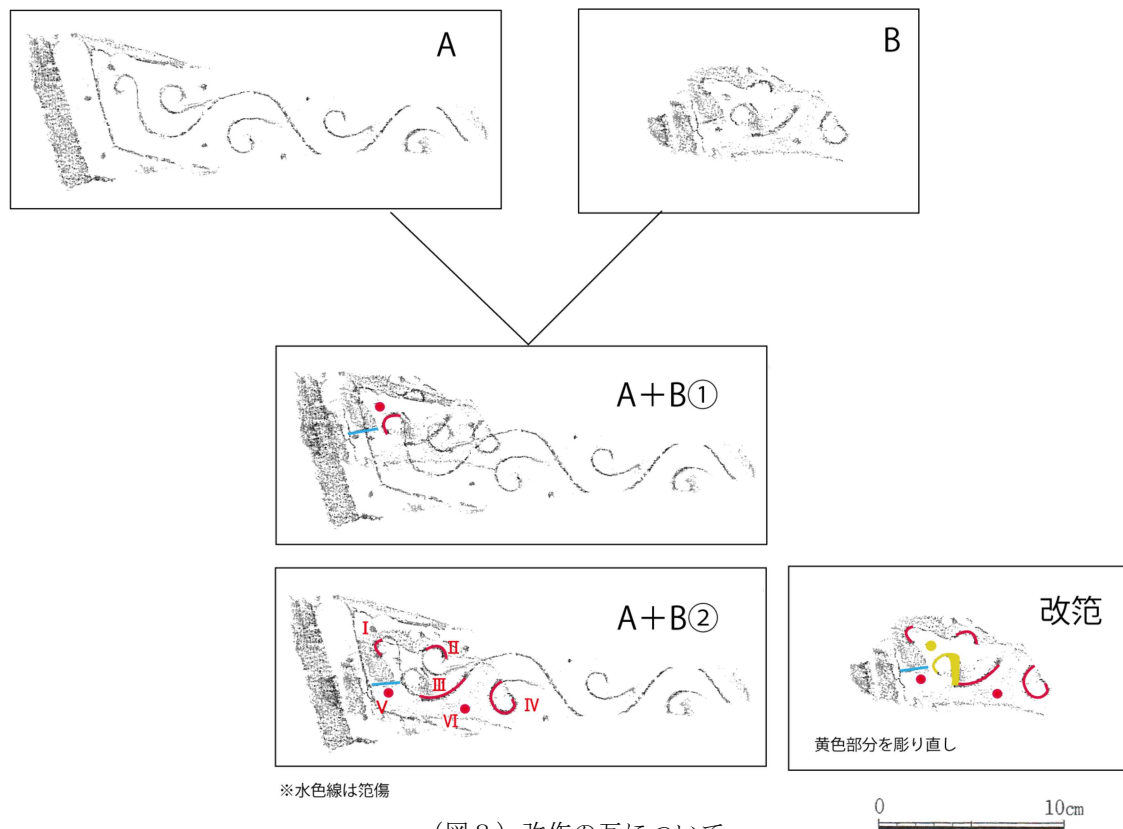
- ・脇区外側を削らないものは上外区外側も削らない。
- ・下外区外側は、木目と思われる縦方向に細い線がみられ、上外区外側より突出している瓦がみられる。
- ・内区左端に斜めに入る範傷は破損または摩耗している瓦を除きすべてに見られる。そのため、脇区外側の仕上げ方と範傷の有無は関係ない。
- ・女瓦部凹面の削り幅は、脇区外側を削る・削らないに関わらず、左側部側を約1cm、瓦当部側を3～4cm削っており、その他の部分は布目痕が残っている。
- ・女瓦部凸面は全面削られており、顎部は直線顎である。
- ・左側部はきれいに削られている。
- ・1点、他のものと文様が多少異なるものがある。範傷は見られる。

		
 ・左端に斜めの範傷（①②）あり	 ・左端に斜めの範傷（②）あり ①の範傷は摩耗のため確認できない	 ・左端に斜めの範傷あり
外区外側を削らない	外区外側を削る	文様が異なる

（図7）僧寺金堂出土 宇瓦7型式 左側部側

ここで、文様が他のものと多少異なる瓦について詳しくみていく。この瓦は、均整唐草文で珠文を配する点は共通するが、左端の唐草の丸みがなく、左端から2番目の内側に巻く唐草がみられない。結論から述べるとこれは宇瓦7型式の改範であると考ええる。軒先瓦の中には、明らかに同範品であるにも関わらず文様の一部が異なっているものがある。例えば、恭仁宮と平城宮に使用されていた鐙瓦から改作の様相が見られる。恭仁宮に使用されていた鐙瓦は外区が線鋸歯文縁であったが、平城宮で使用されたものは外区が凸鋸歯文に変化している。これは、天平17年に恭仁宮から平城宮に遷都した際に瓦工房も移動しており、以前使用していたものと区別するために改範したと考えられている⁽¹³⁾。そこで、明らかに宇瓦7型式である瓦(A)と文様の異なる瓦(B)の拓本をとり、重ね合わせることで比

較を行った（図8）。先述したが、AとBの共通することは内区と外区に珠文を配し、内区には唐草文が巡ることである。また、どちらにも内区の左端に斜めに入る範傷がみられる。Aの左端の唐草文とBの左端の唐草文部分を重ねると、外側に巻く先端部分とその上部にある珠文しか重ならず、範傷の位置も合わない（A+B①）。しかし、範傷部分を合わせてみると（Aは摩耗のため範傷が確認できなかったため、明確に範傷が残るものと合わせ推定位置で考えた）唐草と珠文の6か所（Ⅰ～Ⅵ）が一致する（A+B②）。このことから、AとBの範傷は同じものであり、BもAと同範の宇瓦7型式であると考ええる。Bの瓦を見ると、本来唐草文の先端であったであろうⅠ・Ⅱの部分が途切れていることがわかる。また、Aと重ねたことでⅠとⅢはもともと繋がっていたこともわかった。何かしらの原因でⅠとⅢをつなぐ部分とⅡに続く部分が消えてしまったため、Ⅲに繋がるように唐草の先端部分を彫り直したのだと考える。以上のことから、Bは宇瓦7型式の改範であると考ええる。なお、Bの瓦の顎部は破損のため不明である。脇区外側は破損しているが、わずかに残った部分から削られていると考える。外区外側は破損のため不明である。



②右側部残存

- ・脇区外側を削らないものと削るものの2種類がある。

- ・脇区外側を削るもので上外区外側が残っているものはなかったが、脇区外側を削らないものは上外区外側も削らない。
- ・外区外側には、木目と思われる縦方向に細い線がみられ、上外区外側より突出しているものが見られる。
- ・木目とみられる線には、2本の太い線が平行して規則的に入るものがある（図9）。これは、脇区外側を削る・削らないに関わらず存在している。
- ・女瓦部の凹面は、右側部側を 1.5 cm ～ 4.5 cm、瓦当部側は 2.5 cm ～ 5.0 cm ほど削っており、左側部側より広く削られている。なお、削られていない部分には布目痕が見られる。
- ・凸面は全面削られており、顎部は直線顎である。
- ・右側部はきれいに削られている。



（図9）宇瓦7型式 右側部側

③中央残存

- ・内区だけのものや外区だけのものなど様々である。
- ・1点、上外区の一部に範傷が確認できる（図10）。
- ・女瓦部の凹面は、瓦当部側が 2.0 cm ～ 5.5 cm ほど削っている瓦が見られる。
- ・左右側部残存と同じく、凸面は全面削られている。



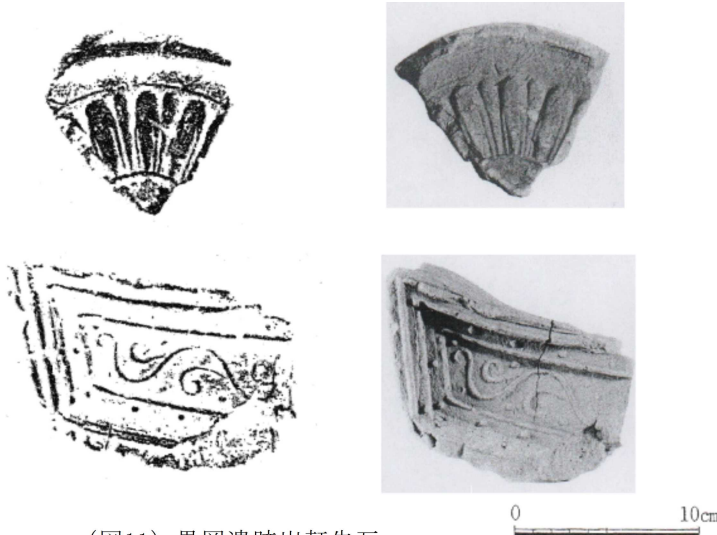
（図10）宇瓦7型式 中央部

（2）豊岡遺跡出土例について

先述したように、鑑瓦9型式及び宇瓦7型式と同範の軒先瓦が旧岩舟町の豊岡遺跡から確認されている。宇瓦7型式に関しては下野国府と大日堂廃寺からも出土することが指摘されているが⁽¹⁴⁾、ここでは鑑瓦と共に出土している豊岡遺跡について扱う。当遺跡は、昭和50年に栃木県史編さん事業の一環として、日本窯業史研究所が発掘調査を行った。遺跡は栃木県栃木市岩舟町に所在しており、三轟山の北東に位置する。現在はJR両毛線が遺跡の南側を走っている。遺跡の場所は古代では都賀郡にあたり、南側に東山道が通っていたと考えられる位置である。当遺跡は古くから瓦の出土することが知られており、寺院跡が存在したものと考えられていた。しかし調査の結果、遺物の散布状態や遺構の状態から、寺院跡とするには法則性に乏しく、建物の屋根を葺くに十分な量の瓦が出土しないことから、瓦葺の建物を中心とした郡衙、もしくは一堂を中心とした郡衙的な色彩の強い遺構、さらには駅家とも考えられると指摘された⁽¹⁵⁾。また、都賀郡の正倉

別院の可能性も指摘されている⁽¹⁶⁾。

豊岡遺跡出土例は、報告書の拓本と写真から分析を行った。鍔瓦 9 型式に関しては、報告書に写真が 6 点掲載され、内 3 点の拓本が掲載されている（図11）。これらの瓦は破片であるが、残存部に範傷は見られず、報告書内にも記載はない。宇瓦 7 型式に関しては、写真と拓本で左側部残存のものと中央残存の 1 点ずつが掲載されている。左端の瓦に注目すると、脇区外側と上外区外側が削られておら



（図11）豊岡遺跡出軒先瓦

ず、形のはっきりとした軒先瓦であることがわかる。また、僧寺出土の瓦に見られる左端の範傷がみられない。女瓦部凹面と凸面に関しては資料がないため詳細は不明だが、実測図をみると、僧寺出土の瓦にもみられるように下外区外側が上外区外側より突出していることがわかった。

（3）小結

以上、僧寺金堂と豊岡遺跡出土の鍔瓦 9 型式及び宇瓦 7 型式について詳しくみてきた。これらを比較し、新旧関係を考える。鍔瓦 9 型式は豊岡遺跡出土の瓦が破片しかなく、僧寺出土のものと比較することは難しい。しかしながら、僧寺から範傷のある瓦が出土していることは事実である。宇瓦 7 型式は左端・中央・右端にわけて分析してきた。僧寺からは、脇区外側の仕上げ方が削るものと削らないものに細分でき、改作と考えられるものも出土した。また、確認できる瓦にはすべて範傷がみられた。一方豊岡遺跡出土例は、脇区外側を削っておらず、範傷も確認できない。このことから、宇瓦 7 型式は 4 つの段階が考えられる。

- ①脇区外側を削らず、範傷のない瓦(豊岡遺跡出土)⇒ 7A 型式
- ②脇区外側を削らず、範傷のある瓦(僧寺金堂出土)⇒ 7B 型式
- ③脇区外側を削り、範傷のある瓦(僧寺金堂出土) ⇒ 7C 型式
- ④脇区外側を削り、範傷のある改範された瓦(僧寺金堂出土)⇒ 7D 型式

以上のように、豊岡遺跡出土の 7A 型式が最も古く、僧寺金堂出土の 7B・C・D と新しくなると考える。これまでの研究で範傷からの新旧関係の指摘はあったが⁽¹⁷⁾、外区外側の調整と改範の瓦からも新旧関係の根拠を示した。

IV. まとめ

本研究では、平成11年から行われた下野市教育委員会の発掘調査による新たな指摘に注目し、郡系軒先瓦について追加された資料の分析を行った。僧寺金堂造営段階で主体的に出土する郡系軒先瓦は、「各郡の寺院・郡衙に使用していたもの」と指摘されていたが⁽¹⁸⁾、生産地ごとに数量分析を行ったところ出土量には大きな差があり、9割を超える量は三毳山麓群内産と考えられる軒先瓦であった。尼寺造営段階に三毳山麓窯跡群内の町谷瓦窯で下野国分寺式軒先瓦が集中的に生産されており、この時期に下野国分寺の瓦生産がひとつの瓦窯に集約されたと考えられているが、新たな資料を含めた状況からみると、僧寺金堂造営段階という下野国分寺創建初期から、生産の中心は三毳山麓窯跡群内の瓦窯であったのだと考える。また、なかでも出土量の多い鑑瓦9型式及び宇瓦7型式について豊岡遺跡出土の同範瓦と比較したところ、範傷や改作の瓦が僧寺金堂出土の瓦にのみ見られることが明らかとなり、僧寺金堂に使用される前から豊岡遺跡で使用されていたことが考えられる。また、宇瓦7型式について4段階の時間差があることを指摘したが、そのうち3段階が僧寺金堂で出土していることが明らかになった。このことから鑑瓦9型式及び宇瓦7型式は、当初都賀郡の豊岡遺跡用に生産されたが、僧寺金堂造営に伴ってむしろ僧寺のために生産・供給していたのではないかと考える。つまり、町谷瓦窯に瓦生産が集中する以前である下野国分寺創建初期から、三毳山麓窯跡群は下野国分寺における瓦生産の中心地であったと考える。

註

- (1) 栃木県教育委員会 1986『ふるさと栃木県のあゆみ』「第2節 律令国家の盛衰と人々の生活 律令政治の展開と下野国」栃木県文化振興事業団
- (2) 源順 撰 1617「和名類聚鈔 卷第3」『和名類聚鈔 20巻』那波道圓
- (3) 虎尾俊哉 編 2007『延喜式 中』株式会社集英社
- (4) 前掲載 (1)
- (5) 旧栃木県都賀郡国分寺町国分にあたる。
- (6) 大橋泰夫 1994「下野国分寺」『シンポジウム関東の国分寺 在地から見た国分寺の造営』関東古瓦研究会
- (7) 大橋泰夫 1997『下野国分寺跡 12 瓦・本文編』栃木県教育委員会
- (8) 前掲載 (7)
- (9) 山口耕一氏ご教示。
- (10) 大橋泰夫 1999「国衙工房の成立—下野国分寺出土瓦の分析—」『官営工房研究会会報6』奈良国立文化財研究所の質疑討論のなかで指摘。
- (11) 主要伽藍以外の調査区より出土したものを総合してその他とした。

- (12) 出土位置が不明なものを不明とした。
- (13) 森郁夫 2001『瓦』法政大学出版局
- (14) 前掲載（7）参照。なお、大日堂廃寺は免鳥遺跡と記載されている。
- (15) 大川清・井博幸 1976『豊岡遺跡発掘調査報告書』日本窯業史研究所
- (16) 大橋泰夫 2001「下野の瓦生産」『栃木県考古学会誌 第22集』栃木県考古学会
- (17) 前掲載（7）
- (18) 前掲載（7）

参考文献

- 大川清 1976『下野の古代窯業遺跡』
- 大川清・井博幸 1976『豊岡遺跡発掘調査報告書』日本窯業史研究所
- 大橋泰夫 1994「下野国分寺」『シンポジウム 関東の国分寺 在地から見た国分寺の造営』関東古瓦研究会
- 大橋泰夫 1996『下野国分寺跡 12 瓦・図版編』栃木県教育委員会
- 大橋泰夫 1997『下野国分寺跡 12 瓦・本文編』栃木県教育委員会
- 大橋泰夫 1999『下野国分寺跡 14 遺構編』栃木県教育委員会
- 大橋泰夫 1999「国衙工房の成立—下野国分寺出土瓦の分析—」『官営工房研究会会報 6』奈良国立文化研究所
- 大橋泰夫 2001「下野の瓦生産」『栃木県考古学会誌 第22集』栃木県考古学会
- 斎藤忠 1991「下野」角田文衛『新修国分寺の研究 第3巻 東山道と北陸道』吉川弘文館
- 栃木県教育委員会 1986『ふるさと栃木県のあゆみ』栃木県文化振興事業団
- 虎尾俊哉 編 2007『延喜式 中』株式会社集英社
- 津野仁 2014『下野国分尼寺跡Ⅱ』栃木県教育委員会
- 中村享史 2011『下野国分尼寺跡』栃木県教育委員会
- 源順 撰 1617「和名類聚鈔 巻第3」『和名類聚鈔 20 巻』那波道圓（国会図書館デジタルコレクション）＜<https://dl.ndl.go.jp/pid/2544218/1/23>>（最終閲覧日 2022 年 11 月 28 日）
- 森郁夫 2001『瓦』法政大学出版局
- 山口耕一 2003「下野国分寺の調査」『考古学ジャーナル 10 月臨時創刊号』ニューサイエンス社
- 山口耕一 2011「下野国分寺」須田勉、佐藤信『国分寺の創建 思想・制度編』吉川弘文館
- 山口耕一 2018「下野国分寺の瓦生産に関する窯跡」『関東甲信越地方の国分寺瓦窯』東国古代遺跡研究会

図版・表出典

- 図 1 大橋泰夫 1999『下野国分寺跡 14 遺構編』栃木県教育委員会／図 2 大橋泰夫 1997『下野国分寺跡 12 瓦・本文編』栃木県教育委員会／図 3～5 （地図）筆者作成（拓本）大橋

泰夫 1996『下野国分寺跡Ⅻ 瓦・図版編』栃木県教育委員会／図6 筆者作成（拓本） 大橋
泰夫 1996『下野国分寺跡Ⅻ 瓦・図版編』栃木県教育委員会、（写真）筆者撮影、しもつけ
風土記の丘資料館所蔵資料／図7 筆者作成、しもつけ風土記の丘資料館所蔵資料／図8 筆者
作成、しもつけ風土記の丘資料館所蔵資料／図9～10 筆者撮影、しもつけ風土記の丘資料館
所蔵資料／図11 大川清・井博幸 1976『栃木県岩舟町 豊岡遺跡発掘調査報告書』栃木県教育
委員会／表1～表6 筆者作成

謝辞

本稿の執筆にあたり、眞保昌弘先生には日頃から熱心なご指導を賜りました。
また、瓦の分析においては、しもつけ風土記の丘資料館の山口耕一氏に未報告資
料の閲覧許可をいただき、調査成果についてもご教示いただきました。末筆では
ありますが、記して深く感謝申し上げます。

（うたか みゆこ・修士課程）